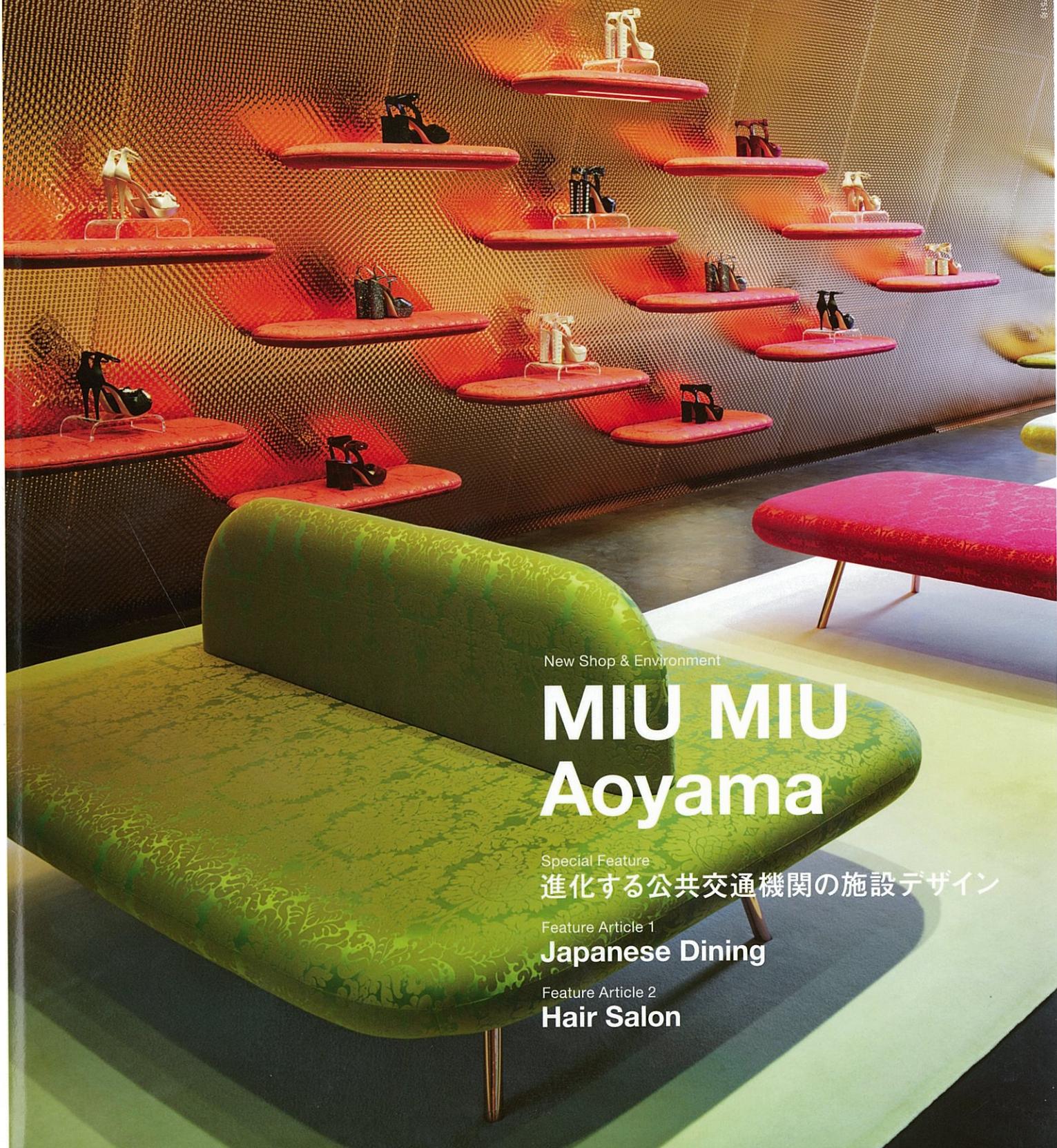


商店建築

SHOTENKENCHIKU MONTHLY MAGAZINE OF STORE DESIGN/INTERIOR/ARCHITECTURE 2015 Vol.60 No.07

7



New Shop & Environment

MIU MIU Aoyama

Special Feature

進化する公共交通機関の施設デザイン

Feature Article 1

Japanese Dining

Feature Article 2

Hair Salon

GLOBAL ×
CREATIVE ×
LUXURY
with GARDE
vol.3

海外デザイナーと連携する ローカルアーキテクトの仕事

Eric Clough氏(212box) ×

太田勝也氏・大久保美穂氏(共にGARDE)

国内外で広く、ラグジュアリーブランドの空間デザインを手掛けるギャルド ユウ・エス・ピ。その仕事の領域を紹介していく当シリーズの特別編として、今回、シューズを核とするファッショングラン、クリスチャンルブタンの日本での店舗開発ストーリーを紹介する。

ギャルドが海外ブランドの日本出店において数多くの物件に携わっている理由の一つに、ローカルアーキテクトとしての対応力が挙げられる。

そのサービスは、海外のデザイナーが提案したアイデアやプランを、日本のスペースに合わせてローカライズしていくものだ。ギャルドは設計デザイン監修まで手掛けているため、ブランドと海外デザイナーの意向を汲み取る理解力と経験値、更に実現可能なカタチにしていくためのさまざまな調整力が問われることになる。

2014年にオープンしたブティック「Christian Louboutin(クリスチャンルブタン)青山」は、1階がウィメンズとメンズのシューズやバッ

グなどのブティックスペースで、2階にはオフィスとショールーム機能が入っている。ブティック部分では、「旅とクラフトマンシップにかけるクリスチャンルブタンの情熱」というコンセプトを表現するため、海外から輸入した素材を用いたり、施工の難しいディテールを採用するなど、随所にこだわりのある空間が実現している。

各国に展開するクリスチャンルブタンのインテリアデザインを手掛けるアメリカの設計事務所212boxのエリック・クラウ氏と、青山店の店づくりを推進したギャルドのブランド事業部ディレクター・太田勝也氏、同じくギャルドのデザイナー・大久保美穂氏に当時のコラボレーションについて聞いた。



カラフルなティンパネルを壁面に用いた「クリスチャンルブタン青山」のメンズエリア(3点とも店舗撮影/高山幸三)



エリック・クラウ氏



太田勝也氏



大久保美穂氏

——「クリスチャンルブタン青山」のプロジェクトはどのようにスタートしたのでしょうか。
太田勝也氏(以下、太田) まだ私たちがローカルアーキテクトを担当することが決定する前に、事前の面談としてエリックに会いに行つたことがそもそも始まりです。その後、青山店に先んじてオープンすることになっていた日本の百貨店内のショップの設計と並行してプロジェクトが進んでいました。

——設計中は、どのようにやり取りをしていましたか。

エリック・クラウ氏(以下、クラウ) 青山店より以前の店舗も私たち212boxがデザイン

を担当していましたが、他都市の店舗と同じく、青山店においてもお客様が「クリスチャンルブタンの世界」に引き込まれるような店舗にしたいと考えました。旗艦店の中で一番大きく、ウィメンズとメンズを両方展開するのは青山店が初めてだったため、クリスチャン・ルブタン氏本人と共に、各エリアの美しさを表現するためにマテリアルや家具を選定し、異なる空間を一つの街のようにまとめた「Louberville」をイメージしました。

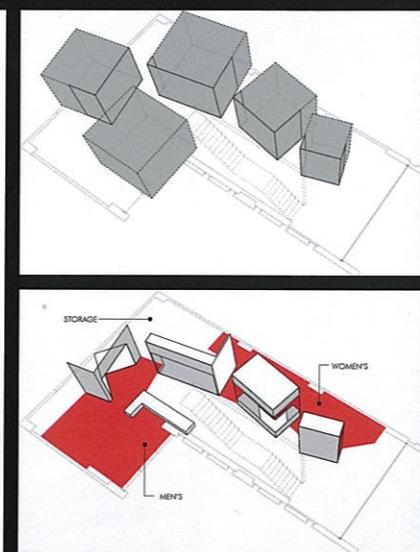
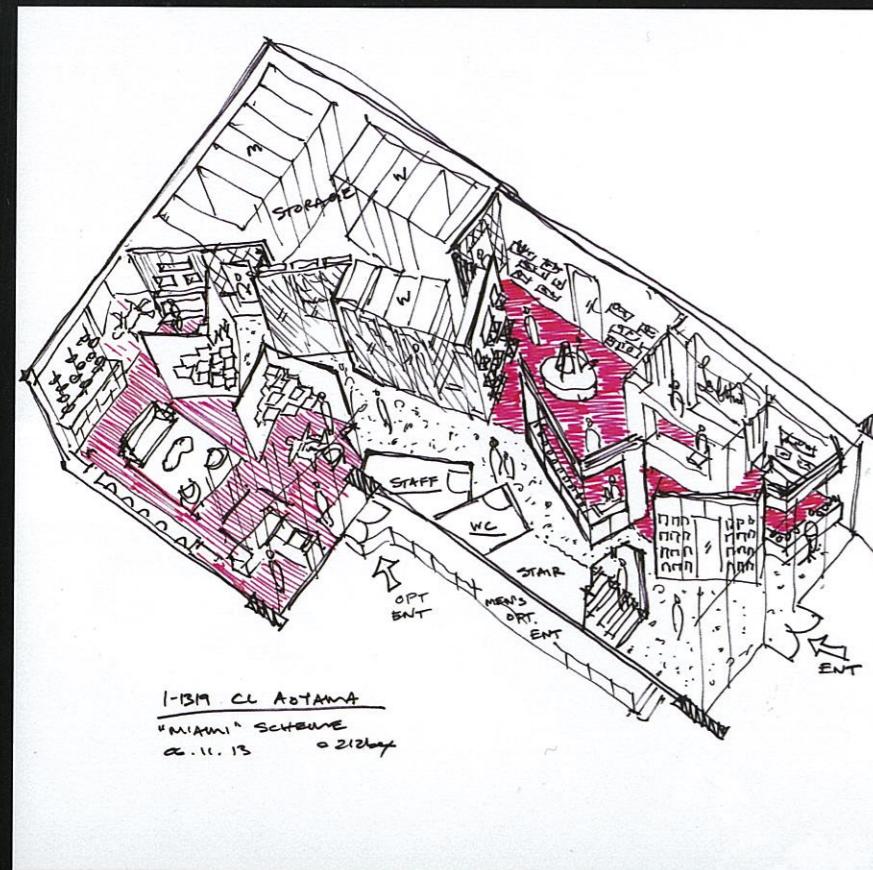
大久保美穂氏(以下、大久保) 212boxからは始めにパースと基本設計図が届き、それを私たちが解読し、ローカライズしてきました。

日米間の時差はありますが、頻繁にコミュニケーションをとりながらの作業でした。

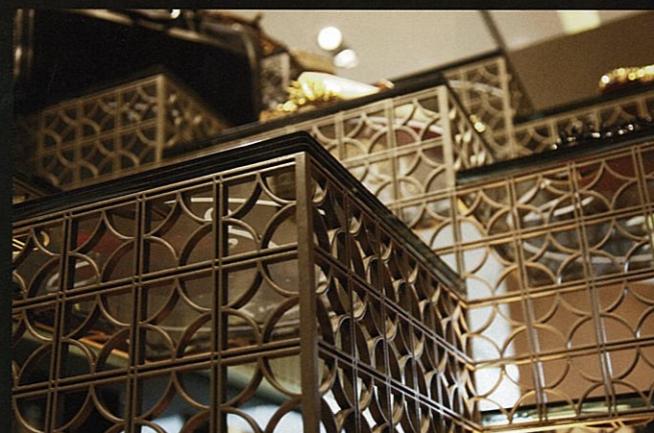
クラウ 約1年間のプロジェクトのうち、ギャルドのメンバーと直接会ったのは3回でしたが、密なコミュニケーションを重ねた結果、プロジェクト完了後はビジネスパートナー以上の関係になりました。

——青山店のデザインコンセプトや、チャレンジしたこと教えてください。

クラウ 店内は、小さなキューブ状の空間が集まったイメージで、靴、バッグなどのアイテムごとにエリアを緩やかに分けて、それぞれのエリアを来店者が巡っていくようなつく



左／212boxのエリック・クラウ氏による青山店の初期段階のスケッチ 右／212boxによるダイアグラム。キューブが集まつたイメージからレイアウトされていることがわかる



212boxがこれまでクリスチャンルブタンの店舗のために開発してきたマテリアル。ブランドロゴやパターンの加工を施したプラスやレザー、スチール格子、石材など

りです。同時に各エリアが、個人のリビングルームのような落ち着ける空間にしています。

各部分については、ストーンタイルはローマ、ティンパネルはニューヨーク、メンズエリアのデザインはドバイの店舗、今までに開発したマテリアルやフォーカスポイントとなるデザインを青山店に取り入れています。これは、日本の高度な職人技術を見込んで試みたことで、見事にその狙いは成功しました。

大久保 弊社では、さまざまな海外のブランドとお仕事をさせていただいているが、とても細かい部分にこだわりを持っているブランドもあれば、全体の雰囲気を重視するブランドもあります。その中でもクリスチャンルブタンは、マテリアルの表現と世界観に強い

こだわりを持ったデザインを追求しているため、とてもおもしろい空間を生み出すことができたと思います。

——それぞれの役割について聞かせてください。また、現場で印象に残っていることはありますか。

太田 アイアンワークや革、ティンパネルなど世界中のさまざまな素材が使われていますが、工期やコストバランス、日本の消防法に照らし合わせて、デザイナーの要望通りの素材を使えないこともあります。その場合は、代替できる素材を選定したり、日本で製作する必要が生じます。その他にも、ローカルアーキテクトの仕事として、クライアントや海外デザイナーの要望を指示されたままにカタチ

にしていくだけでは店舗が成立しない部分もできます。

例えば、この青山店で言えば、エリックが施工現場を訪れた際に、「空間にもっとゆとりを持たせるために、シグネチャーニッヒをえてほしい」と言って、ロゴの入った間仕切り位置の修正を要望してきたことがあります。

しかし、その修正を受け入れてしまうとスペースの間隔が変わり、コンセプトを表現できないと判断したため、その時は端から見たらケンカのような激しいコミュニケーションをしましたね(笑)。でも、結果的には位置を変えないと納得してもらい、竣工後にもその判断は正しかったと感じてもらうことができました。

クラウ 私が現地を訪れる機会は少なかったのですが、現場のことを深く理解したギャルドの意見を信頼して成功した一例です。このプロジェクトでは、この他にもデザインの細かい部分について要望を多く出しましたが、それらにもギャルドのメンバーが着実に応えてくれました。その互いの努力が実り、クリスチャンルブタンの世界観を表現した店舗が完成し、とても満足しています。

我々は、クリスチャンルブタンのプロジェクト含め多くの国で仕事をしていますが、日本での仕事が一番好きです。その大きな理由の

一つは、ギャルドのような信頼できるパートナーがいるからです。

私たちの「デザインに対するこだわりを理解してくれること」。そして、それを「実現できること」、という空間づくりにおいて大切な二つを彼らとは共有でき、細かなニュアンスまで敏感に感じ取ってくれる。

ギャルドのローカルアーキテクトは一人ひとりがデザイナーであるため、我々と同じ視点からデザインのアドバイスを投げ掛けてくるし、施工チームはデザインに興味を持って製作する、という理想的なハーモニーがそこにはあるのです。

——海外のクライアント、デザイナーとやり取りをしながらプロジェクトを進めていく際のポイントは何でしょうか。

大久保 何よりもまずコミュニケーションです。クライアントやデザイナーの要望にローカルアーキテクトが意見するためには、まず、彼らが思い描くイメージを私たちも深く理解することが重要になります。今回のプロジェクトで言えば、例えば彼らのオフィスを訪れた時に、仕事の話し合いだけでなく、212boxのデザインフィロソフィーを聞いたり、何気なく置かれているものを見てオフィスの空気を感じたりと、パートナーを知るために情報収集が必要です。

ローカルアーキテクトの役割というのは、本国の国語の単なる翻訳ではなく、デザインの意味を理解し、それを具現化していくことです。エリックのような世界で活躍するデザイナーと共に仕事をすることで自分も成長でき、世界とつながる仕事ができることにも感謝しています。

太田 彼らのオフィスには、彼らがつくったアイアンワークやオリジナルのタイル、素材のサンプルなどが並んでいて、ディテールや素材へのこだわりを感じ近で感じることで、その後の設計のやり取りで相手がイメージしているものをより共有しやすくなりました。

今回のプロジェクトに限った話ではありませんが、海外の設計者とのコラボレーションでは、まずブランドの目指すもの、そして、設計者の好みや性格まで知ることで、何を表現したいと思っているのか、何を要望されているのかをしっかりと把握することができ、そのブランドとデザイナーの個性やこだわりを、日本に合ったカタチで具現化することが可能になるのです。

クラウ 日本には物づくりの文化があり、技術の宝庫なので、ギャルドとコラボレーションして新しいマテリアルの開発を行いながら、これから多くのプロジェクトに取り組んでいきたいですね。

エリック・クラウ(Eric Clough)／1972年、米国生まれ。ワシントン大学とイェール大学で建築を学ぶ。建築設計をはじめ、インテリア、グラフィック、プロダクトのデザインまで幅広く手掛けた212boxを設立。現在、ニューヨークを拠点に、著名人の住宅プロジェクトや「クリスチャンルブタン」など数多くの店舗を設計している。

おおた・かつなり／ギャルド・ユウ・エス・ビイ ディレクター。GARDEニューヨーク支社勤務を経て、現在はブランド事業部事業部長として、海外ラグジュアリーブランドの日本展開における導入から実施までの一貫した業務においてのコンサルティング、コーディネーション、デザインのサービスを統括している。

おくぼ・みほ／ギャルド・ユウ・エス・ビイ デザイナー。NCIDQ(北米インテリアデザイナー資格)を取得し国内外でリテール、飲食、オフィスなどさまざまな分野のデザインを手掛けてきた。主に日本初進出のラグジュアリーブランドを担当し、本国からの高い評価を得ている。最近では「UGG AUSTRALIA渋谷店」のデザインを手掛けた。

[お問い合わせ]
ギャルドユウ・エス・ビイ TEL:(03)3407-0007



左／「クリスチャンルブタン青山」の店内中央から奥を見通す。右側は精緻な凹凸のあるトラバーチン貼り
右／エントランス付近。中央には、ルブタンのロゴを表したシグネチャーニッヒ

